

趣味について

東北財務局 青森財務事務所長 中島 隆行



私にとって、趣味と言えば、船釣りである。正確に言えば、過去形が正しい。

少々マニアックな話になるが、寄せ餌を使ったマダイ、生き餌で狙うヒラメや疑似餌を使って多様な魚を狙う五目釣りに熱中した。

東京近郊だと、資源減少が著しいため、特に、マダイ、ヒラメは、釣果ゼロも珍しくなく、加えて、ともに5キロを超えるような大物はなかなかお目にかかれない。本気で釣ろうとすると、それなりの努力が必要だ。海中は、当日の気象条件、海水温、潮の干満時刻、潮の流れ等に影響され、刻々と変化する。そんな海中の状況を読み当て、魚の就餌方法等の動きをイメージし、仕掛け、道具、餌の選択、誘い等、自分が持っているすべての技術を繰り出し、魚に食わせる。そして、極限まで細くしたハリスを切られないよう、魚との駆け引きに細心の注意を払わなければならない。

だから、人よりも大量に、かつ大きい魚を釣ろうとすれば、日々、釣果、天候、最新の釣法、道具といった情報の収集、分析は怠れない。寸暇を惜しんで、仕掛けを縛ったり、万全の状態で使えるよう道具の手入れをしたり、ついでに様々な妄想をしたりと、釣り一色の生活になる。そう、釣りバカ日誌の浜ちゃんそのものである。ちなみに私は、釣りに行く日の負担を軽くするため、船宿近くの海辺に転居した。そのため、月に数回の釣行のために、通勤時間が1時間半を超えることとなった。

このように、釣り人としてはかなり「バカ」な部類に属し、自分で言うのもなんだが、竿頭（その船で一番の釣果）になることもあつ

たり、大物もそれなりに釣りあげたりと、気分はほぼ漁師だった。

しかし、そんな生活が長く続くと、常に結果を求めるストイックな釣りに終始してしまい、釣れなければ、どうして釣れないのかと、悶々と考えてしまう。釣れてもさらに上を追い求め、余韻も楽しめない。そうして段々と、海の上で過ごすことの非日常感や解放感に浸ることを味わう余裕もなくなり、釣りとの距離感を掴めなくなってしまった。大好きな釣りに行っても、楽しめない。そんな葛藤を抱え悩んでいたとき、米国転勤の発令があり、釣りから離れた。少しほっとした覚えがある。

帰国して7年ほど経過したが、未だに釣りを再開しないでいる。ほとんどの釣り人は、純粋に釣りが好きで一生付き合っていけるのだろう。自分自身、どこでどう道を踏み外したのか、不器用なせいなのか、以前のようにのめり込みすぎることなく、程よい距離感を保って釣りに興じられるか自信がない。かといって、他の趣味を見つける気にもならない。それでも、海が見えれば模様は気になるし、漁船を見かけると少し高揚する。まだ釣りへの思いはあるのかもしれない。そんな面倒くさい性格が恨めしい。

奇しくも釣りが盛んな青森に赴任した。太平洋、日本海、陸奥湾と海に囲まれ、魚種が豊富で、これほど釣り人の心をくすぐる地域も珍しい。これも何かの縁。機会があれば、豊かな青森の海で釣りと自然を思いっきり楽しんでみようか。今までとは違う釣りとの付き合い方が見えてくるかもしれない。